

## 水稻の病害虫防除対策（6月）

※農薬の登録内容については慎重に校閲していますが、登録内容の変更は随時行われています。また、同じ農薬名でも農薬会社によって登録内容が異なることがあります。独立行政法人農林水産消費安全技術センターホームページ（<http://www.acis.famic.go.jp/searchF/vt11m000.html>）等で最新の登録内容を確認してください。（記載中の登録内容は令和2年5月13日現在）

### いもち病（葉いもち）

- (1) 補植用置苗は、葉いもちの伝染源になりやすいので、すみやかに処分してください。
- (2) 補植用置苗や移植株に発病が見られたら、置苗は直ちに処分し、置苗周辺に薬剤散布を行ってください。
- (3) 葉いもち予防の水面施用剤を施用する場合は、各薬剤の施用適期に遅れないように施用してください。
- (4) B L A S T A Mで感染好適条件や準好適条件が広域に連続して出現した時は、その7～10日後に病斑が見られる可能性があるため、水田に入って病斑の早期発見に努めてください。
- (5) 薬剤防除の実施にあたっては、次のことに注意してください。
  - ア 耐性菌の出現を防ぐため、同じ系統の薬剤の連用は避けてください。県内でもQoI剤（表中の薬剤系統C3）に対する耐性菌の発生が確認されました。QoI剤を含む育苗箱施用剤を使用した場合は、本田防除では系統の異なる薬剤を使用してください。
  - イ 水面施用剤は、湛水状態にして所定量を均一に施用してください。施用後は7日間以上、止水状態を保ち、落水や掛け流しはしないでください。
  - ウ オリブライト1キロ粒剤はイネの葉に葉斑を生じる場合があります。特に、幼穂形成期以降の使用は、葉斑の発生を助長します。
  - エ バック剤やジャンボ剤は、藻や浮草で拡散が阻害される場合は使用を避けてください。

表1 いもち病（葉いもち、穂いもち）の防除薬剤（茎葉散布剤）

剤型	薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a当たり使用量(散布液量)(注)	使用回数の制限※
粉剤	ノンプラス粉剤DL	トリシクラゾール	I1	収穫7日前まで	3～4kg	2回以内
		フェリムゾン	U14			
	ビーム粉剤DL	トリシクラゾール	I1	収穫7日前まで	3～4kg	3回以内
	ブラシン粉剤DL	フェリムゾン	U14	収穫7日前まで	3～4kg	2回以内
		フサライド	I1			
ラブサイト粉剤DL	フサライド	I1	収穫7日前まで	3～4kg	3回以内	
液剤、乳剤、フロアブル剤、ゾル剤	アミスターエイト	アゾキシストロピン	C3	収穫14日前まで	1,000～1,500倍 (100～200L)	3回以内
	カスミン液剤	カスガマイシン	D3	穂揃期まで	1,000倍	2回以内
	ノンプラスフロアブル	トリシクラゾール	I1	収穫7日前まで	1,000倍 (60～150L)	2回以内
		フェリムゾン	U14			
	ビームゾル	トリシクラゾール	I1	収穫7日前まで	1,000倍	3回以内
	フジワン乳剤	イソプロチオラン	F2	収穫14日前まで	1,000倍 (60～150L)	2回以内
	ブラシンフロアブル	フェリムゾン	U14	収穫7日前まで	1,000倍 (60～150L)	2回以内
フサライド		I1				

(注) 液剤、水和剤、乳剤、フロアブル剤の散布液量は、農薬ラベルに記載がない場合、10a当たり140～150L散布する。

表2 葉いもちの防除薬剤・水面施用剤（粒剤、パック剤、ジャンボ剤）

剤型	薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	10a当たり使用量	使用回数 の制限※
粒剤、 パック 剤、 ジャン ボ剤	ルーチン粒剤	イソチアニル	P3	移植直後～葉いもち の初発3日前 (収穫30日前まで)	1kg	2回以内
	オリゼメートパック	プロベナゾール	P2	葉いもち初発10～7日 前 (収穫14日前まで)	小包装(パック) 20～26個(1～1.3kg)	2回以内
	オリゼメート粒剤			葉いもち初発10日前 ～初発時 (収穫14日前まで)	3～4kg	2回以内
	フジワン粒剤	イゾプロチオラン	F2	葉いもち初発10～7日 前 (収穫30日前まで)	3～5kg	2回以内
	コラトップ粒剤5	ピロキロン	I1	葉いもち初発10日前 ～初発時	3～4kg	2回以内
	コラトップ1キロ粒剤12			葉いもち初発10日前 ～初発時	1～1.5kg	
	コラトップジャンボP			葉いもち初発20日前 ～初発時	小包装(パック)10～ 13個(500～650g)	
オリブライト1キロ粒剤	メトミノストロビン	C3	葉いもち初発10日前 ～10日後 (出穂10日前まで(但 し、収穫45日前ま で))	1kg	1回	

表3 無人ヘリコプター（無人航空機）散布によるいもち病の防除薬剤

剤型	薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり散布液量	使用回数 の制限※
乳剤、ゾル剤	アミスターエイト	アズキストロビン	C3	収穫14日前まで	8倍、0.8L	3回以内
	ビームゾル	トリシクラゾール	I1	収穫7日前まで	6～8倍、0.8L	3回以内
	フジワン乳剤	イゾプロチオラン	F2	収穫14日前まで	8倍、0.8L	2回以内
	ブラシンゾル	フェリムゾン	U14	収穫7日前まで	8倍、0.8L	2回以内
フサライド		I1				
粒剤	オリゼメート粒剤20	プロベナゾール	P2	収穫14日前まで	1kg	2回以内
	オリブライト1キロ粒剤	メトミノストロビン	C3	出穂10日前まで(但し、収 穫45日前まで)	1kg	1回
	コラトップ粒剤24	ピロキロン	I1	葉いもちに対しては初発1 0日前～初発時、穂いもち に対しては出穂30日前～5 日前まで	0.5kg	2回以内
	コラトップ1キロ粒剤12			1kg		

- ※ 使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。
- ・トリシクラゾールを含む農薬の総使用回数：4回以内(但し、育苗箱への処理は1回以内、本田では3回以内)
  - ・フェリムゾンを含む農薬の総使用回数：2回以内
  - ・フサライドを含む農薬の総使用回数：3回以内
  - ・アズキストロビンを含む農薬の総使用回数：4回以内(但し、育苗箱散布は1回以内、本田では3回以内)
  - ・カスガマイシンを含む農薬の総使用回数：4回以内(但し、種子浸漬は1回以内、育苗箱への処理は1回以内、本田では2回以内)
  - ・イゾプロチオランを含む農薬の総使用回数：3回以内(但し、移植前は1回以内、本田では2回以内)
  - ・イソチアニルを含む農薬の総使用回数：3回以内(但し、直播での播種又は移植時までの処理は1回以内、本田では2回以内)
  - ・プロベナゾールを含む農薬の総使用回数：2回以内(但し、移植時までの処理は1回以内)
  - ・ピロキロンを含む農薬の総使用回数：3回以内(但し、直播では種時又は移植時までの処理は1回以内、本田では2回以内)
  - ・メトミノストロビンを含む農薬の総使用回数：1回

## イネドロオイムシ

- (1) 有効積算温度から、防除適期である幼虫のふ化盛期は平年並と予想されます(表4)。
- (2) 幼虫(3~4齢幼虫、「ドロ」の大きさが4~5mm)が1株当たり10頭以上の場合は、薬剤防除を実施してください(表5)。
- (3) 水面施用剤(シクロパック粒剤)は湛水状態で所定量を均一に施用し、その後7日間以上止水してください。

表4 イネドロオイムシの成虫侵入盛期と次世代幼虫防除適期の推定

アメダス地点	侵入盛期(月/日)			幼虫の防除適期(月/日)			
	本年	平年	平年差(日)	本年	平年	平年差(日)	
中通り	梁川	5/15	5/15	0	5/29	5/28	1
	福島	5/13	5/12	1	5/27	5/24	3
	二本松	5/16	5/16	0	5/29	5/28	1
	郡山	5/18	5/19	-1	5/31	5/30	1
	白河	5/24	5/20	4	6/2	6/1	1
	東白川	5/19	5/18	1	5/31	5/30	1
会津	猪苗代	5/29	5/29	0	6/12	6/11	1
	若松	5/18	5/18	0	5/29	5/29	0
	喜多方	5/21	5/21	0	5/30	6/1	-2
	西会津	5/24	5/22	2	6/2	6/3	-1
	田島	5/28	5/28	0	6/10	6/11	-1
浜通り	相馬	5/24	5/21	3	6/3	6/2	1
	浪江	5/16	5/20	-4	6/1	6/1	0
	飯舘	5/29	5/27	2	6/10	6/9	1
	広野	5/19	5/21	-2	6/2	6/3	-1
	小名浜	5/18	5/19	-1	5/31	6/2	-2

注1) 4月1日起算。発育零点を11.0℃、有効積算温度が140日度に達した日を侵入盛期、220日度を防除適期(ふ化盛期)とした。

注2) 本年度予測は、5月24日まではR2実測値、その後は最も早かったH27の実測値を用いた。

注3) 平年値は、H22~R1の予測値の平均とした。

表5 イネドロオイムシの本田防除薬剤

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	防除時期	使用方法	使用時期(収穫前日数)	使用濃度、10a当たり使用量	使用回数の制限※
MR. ジョーカー粉剤DL	シラフルオフエン	3A	6月上旬~中旬	散布	収穫7日前まで	3kg	2回以内
スミチオン粉剤3DL	MEP	1B		散布	収穫21日前まで	3~4kg	2回以内(但し、出穂前は1回)
シクロパック粒剤	シクロプロトリン	3A		水田に小包装(パック)のまま投げ入れる。	収穫60日前まで	小包装(パック)10個(600g)	2回以内

※使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。

- ・シラフルオフエンを含む農薬の総使用回数 : 2回以内
- ・MEPを含む農薬の総使用回数 : 3回以内(但し、種もみへの処理は1回以内、育苗箱散布は1回以内、本田では2回以内)
- ・シクロプロトリンを含む農薬の総使用回数 : 2回以内

### イネヒメハモグリバエ

- (1) 深水管理や直播栽培では、被害が発生しやすいので注意してください。
- (2) 発生が多い場合は、初発時に本田防除を行ってください(表6)。  
トレボン粒剤は湛水状態で水面施用し、その後は7日間以上、止水状態を保ち、落水や掛け流しをしないでください。

表6 イネヒメハモグリバエの防除薬剤

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	防除時期	使用方法	使用時期(収穫前日数)	使用濃度、10aあたり使用量	使用回数の制限 ※
トレボン粒剤	エトフェンプロックス	3A	5月中旬～6月上旬	散布	収穫21日前まで	2～3kg	3回以内

※使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。  
・エトフェンプロックスを含む農薬の総使用回数：3回以内

### イネアオムシ(フタオビコヤガ)

- (1) 幼虫が葉を食害し、幼穂形成期以降、特に出穂期前後の加害は収量に影響を及ぼします。  
山沿い地域の風通しの悪い水田や、生育が遅れたイネ、葉色の濃いイネは多発しやすくなります。
- (2) 本県では年2～4回の発生が見られ、成虫は8～9月の第2～3世代の発生が目立ちます。第2～3世代幼虫の薬剤防除時期の目安は7月上旬～8月です。局地的に6月のうちから食害が多いほ場が見られることがあるので注意が必要です。  
前年に被害の見られた地域では発生に注意し、7月上旬～中旬の幼虫発生初期(若齢幼虫による「かすり状」の食害痕が見られる時期)に防除します(表7)。

表7 イネアオムシ(フタオビコヤガ)の防除薬剤

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	防除時期	使用方法	使用時期(収穫前日数)	使用濃度、10aあたり使用量	使用回数の制限 ※
スミチオン乳剤	MEP	1B	7月上旬及び8月上旬～中旬	散布	収穫21日前まで	2,000～4,000倍(60～150L/10a)	2回以内

※使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。  
・MEPを含む農薬の総使用回数：3回以内(但し、種もみへの処理は1回以内、育苗箱散布は1回以内、本田では2回以内)

### イナゴ類

- (1) 年1回の発生で、6月上旬からふ化幼虫が確認されます。若齢幼虫は主に畦畔雑草で生活し、成育が進むにつれて水田に侵入し始め、7月下旬以降水田内への侵入が増加します。
- (2) 例年、発生が多いほ場では、水田内部への侵入が増加する前のふ化終期(6月中旬～7月上旬)を対象とした防除を行います。この時期は、ふ化幼虫が畦畔際にとどまっていることから、畦畔雑草地と畦畔際を中心に薬剤散布してください(表8)。  
トレボン粒剤は湛水状態で水面施用し、その後は7日間以上、止水状態を保ち、落水や掛け流しをしないでください。

表8 イナゴ類の防除薬剤

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	防除時期	使用方法	使用時期(収穫前日数)	使用濃度、10aあたり使用量	使用回数の制限 ※
アルパリン粉剤DL スタークル粉剤DL	ジノテフラン	4A	6月中旬～7月上旬	散布	収穫7日前まで	3kg	3回以内
トレボン粒剤	エトフェンプロックス	3A		散布	収穫21日前まで	2～3kg	3回以内

※使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。  
・ジノテフランを含む農薬の総使用回数：4回以内(但し、育苗箱への処理及び側条施用は合計1回以内、本田での散布、空中散布、無人航空機散布は合計3回以内)  
・エトフェンプロックスを含む農薬の総使用回数：3回以内